

接続の表現形式の選択に対する学習者の意識 ——言語運用力の向上につながる文法学習に向けて——

山下 直

0. はじめに

学習者が書く文や文章には、日本語としては誤っていないものの、言いたいことを明快に言い表せていないものが少なくない。このような表現が生じる要因について、山下(2010)では学習者の文型選択意識に着眼して論じた¹⁾が、本稿では接続の表現形式の選択に対する意識に着眼し、言語運用に対する意識を高めることに重点を置く文法学習指導の重要性を指摘する。

分析した資料は、山下(2010)と同様に、2008年6月に東京都内の私立中高一貫女子校の中学1年生199名が書いた「オツベルと象」(宮沢賢治)のあらすじである。接続の表現形式の選択のしかたに着眼するにあたって、「オツベルと象」の冒頭から白象が登場するまでの場面について、白象の登場部分とその前の部分とをどのような表現形式でつないでいるかに着眼した。

1. 白象の登場の場面の前に置かれる文の種類

「オツベルと象」は、作品の冒頭部分でオツベルの工場での日常的な光景について語られた後、白象の登場が描かれる。したがって、あらすじにおいても、白象の登場を述べる前にオツベルの工場での日常的な光景を述べることとなる。本稿では、白象の登場の直前の文に着眼して、「シテイル(スル)」型、「イル」型、「…ダ」型、「～ノ話」型、冒頭型の五種類に分けてとらえることとした。

- (1) あるところに、オツベルという男がいた。オツベルはとても賢く、十六人も百姓を雇って、新式稲こき機械で働かせていた。ある日、どんな理由か分からずに、とてもきれいな白象がやって来た。
- (2) 十六人の百姓を働かせている主人である、オツベルという人物がいた。ある日、小屋で百姓たちが働いているところに、白象がやって来た。
- (3) ある仕事場にオツベルと十六人の百姓がいた。オツベルという男は、稲こき機械を六台も所有している財産家で、仕事場ではリーダー的な存在である。ある日、白象が仕事場にやって来た。

(4) この物語は、オツベルという金持ちの男の話です。ある日、仕事場に白象がやって来ました。

上の(1)～(4)を見ると、「ある日」で始まる文の直前の文末が、(1)は「働かせていた」、(2)は「(オツベルという人物が)いた」、(3)は「(リーダー的な存在)である」、(4)は「～の話です」となっている。

(1)のように文末が「シテイル、シテイタ、スル、シタ」などとなっているものは、オツベルが日常的に行っている行為について述べる文、(2)のように文末が「イタ、イル」などとなっているものは、オツベルという人物の存在を示す文、(3)のように文末が「ダ・デアル」などとなっているものは、オツベルがどんな人物かを述べる文、(4)のように「～ノ話デス」などとなっているものは、「オツベルと象」の概要を簡潔に説明する文となっている。

このように、白象の登場の直前の文は、文末の型とその文の内容に対応する関係が見られる。白象の登場をどう接続するかは、直前の文の内容と深く関わる。その点から考えると、直前の文の文末の型への着眼は有効であると言える。そこで、上に示した(1)～(4)をそれぞれ、「シテイル(スル)」型、「イル」型、「…ダ」型、「～ノ話」型と呼ぶことにする。なお、

(5) これは、オツベルと象の話を牛飼いが語ったものです。ある日、地主である金持ちのオツベルのもとへ、一頭の白象が林の中からやって来ました。

の下線部は、文末が「……ものです」となっているが、オツベルがどんな人物かではなく、「オツベルと象」が牛飼いによって語られた話であることを述べている。このようなタイプの文は、あらすじの前置きとも言える文になっている点で、作品の概要を説明する「～ノ話」型と共通する面を持つ。そこで、(5)のような文は「…ダ」型ではなく「～ノ話」型とすることにした。

また、このほかにも、あらすじの冒頭文で白象の登場を述べるものがある。

(6) ある日、オツベルの仕事場に白象がやってくる。

(6)は、この一文があらすじの冒頭文となっている。このような例を、上に示した4つの型とは別に冒頭型として区別する。冒頭文は直前の文を持たないため、接続の表現形式も持たない。また、「～ノ話」型は、あらすじの前置きとも言える文になっている点で、他の型と必ずしも同質には扱えない面がある。これらのことから、本稿では、「シテイル(スル)」型、「イル」型、「…ダ」型を主な考察の対象とした。

2. 接続の表現形式としての「そこに」「すると」「ある日」

2-1. 「そこに」「すると」「ある日」の出現傾向

1. で整理した直前の文の類型にしたがって、接続の表現形式の出現数を示したものが下の表1である。接続の表現形式は、原則として、白象の登場が述べられる直前の文の直後に用いられる表現形式とし、先に示した(1)～(5)の「ある日」のようなものも含める。そのため、いわゆる接続詞だけでなく、指示語や副詞を含む文の成分なども含まれる。

表1を見ると、接続の表現形式は、「ある日」が49例、「そこに」が20例、「すると」が17例で、全125例のうちの約7割(68.8%)をこの三種が占めている。それ以外の39例が九種の表現形式に分かれ、いずれも2～7例の出現にとどまっている。そこで、「ある日」「そこに」「すると」に注目して考察していくこととする。

それぞれの出現の傾向を見てみると、「そこに」は85%(17例)、「すると」は82.4%(14例)が「シテイル(スル)」型に集中して出現している。一方、「ある日」は特定の型に集中して出現する傾向は見られない。白象の登場を導く接続の表現形式として、多くの学習者が「ある日」「そこに」「すると」を選択しているが、「そこに」「すると」は「シテイル(スル)」型に集中して選択されているのに対し、「ある日」は直前の文の類型に関係なく選択されていることになる。

2-2. 非日常の訪れを表す「そこに」

(7) オツベルは、十六人の百姓を率い、稲こき機械を六台も据えつけて、自分は何もせず、仕事を百姓たちにまかせ、のんのんのんのんやっていた。そこへ、どういわけか白象がやって来た。

(7)の「そこへ」は直前の文の内容を受けて「オツベルが……のんのんのんのんやっていたト

表1 直前で切るタイプ：直前の文の類型別分布

	シテイル(スル)	イル	…ダ	～ノ話	他	計
～に		2	1	3	1	7
そこに	17	2	1			20
その〇〇に	4	1	2			7
ある日	15	8	16	10		49
そんなある日	5		1			6
すると	14	2	1			17
そして	2	3				5
そしたら	5		1			6
しかし			2			2
その時	2					2
第一日曜		1	1			2
その他			1		1	2
計	64	19	27	13	2	125

コロヘ」という意味で後の文につながってゆく。

この部分（場面）はもとの作品では、オツベルの工場での日常的な光景が描かれた後、

とにかく、そうして、のんのんのんのんやっていた。

そしたらそこへどういわけか、その、白象がやってきた。

となっており、(7)は原文の表現をほぼそのまま用いていることが確認できる。原文の「とにかく、そうして」の「そうして」は、その前に描かれているオツベルの工場での日常的な光景を指し「とにかくイツモ オツベルガ ヤッテイルヨウニシテ、のんのんのんのん……」というような意味でとらえられる。その後の「そしたら、そこへ」は、「イツモドオリニヤッテイタラ、ソコノトコロヘ」という意味で後の部分につながっている。

この場面のポイントは、オツベルの工場のいつもと変わらない日常に白象がいきなり登場したことを示すことにある¹⁰。白象の登場は、非日常の訪れであるとともに、これから始まる作品の中心的なエピソードの起点ともなっている。したがって、あらずじにおいても、オツベルの日常に非日常が訪れたことや、新しいエピソードの起点となっていることを示すことが望ましい。(7)では原文の表現を生かすことで、白象という非日常的な存在が突然訪れたことを述べているととらえられる。

(8) あるところに、オツベルという男がいました。オツベルは、稲こき工場のリーダー格です。ある日、いつものように、百姓どもは稲をこき、オツベルがぶらぶら工場の中を歩いていました。そこへ、一匹の美しい白象がひょっこりやって来ました。

(8)は(7)のように原文の表現をそのまま用いているわけではない。けれども、(8)の「そこへ」も「工場の中を歩いていたトコロヘ」という意味で後の文につながっているととらえることができる。直前の文の「いつものように……歩いていました。」がオツベルの工場での日常的な光景を表し、「そこへ」は「ソノ日常ノ只中へ」という意味で後の部分につながり、「白象」の突然の登場が示されている。そのほか、「いつものように」「ひょっこり」等の語句も効果的に用いられている。

また、「そこに(へ)」を「～シテイルトコロニ(へ)」ととらえることを支持する例として、次のようなものがある。

(9) 十六人の百姓が必死に働いている中、その百姓たちをやとっている、ずる賢く計算高いオツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、ぶらぶら行ったり来たりしている。昼食時には、ピフテキやオムレツのほくほくしたのを食べる。そんなところへ、どこからか一匹の白象がやって来る。

(9)は、「……オツベルは……行ったり来たりしている。昼食時には、……食べる。」の部分がオツベルの日常を表している。「そんなところへ」は前に述べられたオツベルの日常の光景を受け、まさに「～シテイルトコロへ」という意味を表しているにほかならない。この「そんなところへ」を「そこへ」に置き換えても文意はほぼ同じである。このことから、「そこへ」を「～シテイルトコロへ」ととらえることが支持される。

このように、「シテイル (スル)」型の直後に「そこに」で白象の登場を接続することは、「シテイル (スル)」の部分で毎日のように繰り返されているオツベルの工場での日常的な光景を述べ、「そこに」以下の部分でその日常の中に〈突然訪れた非日常〉として白象の登場が述べられる形になっていることが分かる。

2-3. エピソードの起点を表す「すると」

(10)オツベルという大変ずる賢い主人と、オツベルがうまく自分のものにした白象の話。オツベルがいつものように新式の機械と十六人の百姓を雇って、仕事の監督をしていた。すると、いきなり森から真っ白な象がやって来た。

(11)ある牛飼いが物語りました……。オツベルというのは、この物語の主人公で、そりゃあもう、稲こき機械を六台も揃えつけて、琥珀のパイプを持っているほど財力があり、頭の回転も速い。おまけに度胸や勇気も持っている。さて、今日またこの小屋では、十六人の百姓どもが稲をかたっぱしからこいている。オツベルは、それを見ながら、小屋を行ったり来たりしていた。すると、白象がやって来た。

上の2例は、いずれも「すると」を用いている。(10)は、「いつものように」という語が用いられていることからわかるように、「オツベルが……監督をしていた。」という文がオツベルの工場での日常的な光景を表していると言える。「すると」はそれを受けて「オツベルが 監督ヲシテイルト (シテイタラ)」といったような意味で後の部分につながっている。

同様に(11)も、「さて、今日また……百姓どもが……こいている。オツベルは……行ったり来たりしていた。」の部分が、オツベルの工場の日常的な光景を表している。「すると」はそれを受けて「百姓ドモガ 稲ヲコキ、オツベルガ 行ッたり来タリシテイルト (シテイタラ)」といったような意味で後の部分につなげる役割を担っている。

ところで、「すると」は「～シテイルト (次ニ)」のような意味で、出来事が継続して起きることを表していることととらえることもでき、その点では「～シテイルトコロニ」という意味で日常の只中にいきなり非日常が訪れたことを表す「そこに」とは異なる意味的側面を持つと言える。

だが、先にも述べたように、白象の登場の場面のポイントは、非日常の訪れを表すとともに、これから始まる作品の中心的なエピソードの起点となっていることを表すことでもあった。「すると」が場面の転換を表す接続詞であることから考えれば、(10)(11)ともにオツベルの工場の日常

的な光景から転じて、新しいエピソードの起点として白象の登場が提示されていることが首肯されよう。

このようにとらえることで、「シテイル（スル）」型の直後に「すると」で接続することも、もとの作品の内容を表すのに望ましい形になっていると言ってよい。

2-4. 非日常の訪れやエピソードの起点を表さない「そこに」「すると」

ここまで「シテイル（スル）」型の直後に「そこに」「すると」を選択するパターンが、非日常の訪れや新しいエピソードの起点を表すのに適していることを述べてきた。一方で、出現数は少ないながら「イル」型、「…ダ」型の直後に「そこに」「すると」を選択している例も見られる。

(12)あるところに、とてもお金はあるが、少しずる賢いオツベルという主人がいました。そこに、白象がある時やって来て、オツベルは少し慌てるが、冷静さを装いながら、うまく白象を自分のものにしました。

(13)オツベルという人を従えるのが上手な男が、十六人の百姓とともに小屋にいた。すると、白象がやって来た。

(14)オツベルは、百姓を雇っていて、大金持ちです。そこに、白象がやって来ました。

(15)オツベルという人物がいた。オツベルは、十六人もの百姓を働かせ、稲こき機械を六台も所有しているほど金持ちだが、ずる賢く腹黒い。すると、ある時、白象がオツベルのもとへやって来た。

上の4例のうち、はじめの2例は「イル」型、後の2例が「…ダ」型である⁶⁴。これまでのとらえ方に従えば、(12)は「オツベルという主人がいるトコロニ、白象がやって来た」、(13)は「オツベルという男が小屋にイタラ（イルト）、白象がやって来た」という意味で後の文につながっているととらえることができる。

ところで、白象の登場を非日常の訪れや新しいエピソードの起点として表すには、オツベルの工場での日常的な光景を示すことが必要である。「シテイル（スル）」型の文は日常的な光景をオツベルの行為として表すが、「イル」型の文はオツベルの存在を示すだけで日常的な光景を示すことはできない。したがって、「イル」型の文に「そこに」「すると」を用いても、白象の登場を非日常の訪れや新しいエピソードの起点として表すことが十分にはできないと言える⁶⁵。

「…ダ」型においてはその傾向がさらに著しい。(14)は「金持ちデアルトコロニ」、(15)は「腹黒イト」といった意味にとらえざるを得ない。これらはオツベルがどんな人物かを示してはいるが、オツベルの工場の日常的な光景を示しているとは言えず、白象の登場が非日常の訪れや新し

いエピソードの起点であることを表しているとは言いがたい。

もちろん、これらの表現は日本語として成立しないというほどのものではない。しかしながら、「シテイル（スル）」型の直後に「そこに」「すると」を用いる場合には、「そこに」が前の部分に述べられたオツベルの工場の日常的な光景を指したり、「すると」が場面の転換という明確な接続機能を示したりして、二つの文の間に明確な意味的接続的関係をとらえることができる。その一方で、「イル」型、「…ダ」型の直後に「そこに」「すると」を用いる場合には、「シテイル（スル）」型の直後に「そこに」「すると」を用いる場合に見られるような明確な意味的接続的関係を見出すことは難しいと言わざるを得ない。

このことから考えると、「イル」型、「…ダ」型に「そこに」「すると」がほとんど出現しないという学習者の選択は、理にかなったものとなっていると言える。

2-5. 前後の関係構成に柔軟な「ある日」

ここでは、いずれの型にもまんべんなく出現する「ある日」について見ていく。

(16) オツベルは、小屋に稲こき機械を六台も据え付けて、十六人の百姓どもに稲をこかし、大きな琥珀のパイプをくわえて監視していた。ある日、突然、小屋に白象がやって来た。

(17) オツベルという、お金持ちでずる賢い、百姓を雇っている人がいた。ある日、突然、白象がやって来て、オツベルの仕事場に泊まることになった。

(18) あるところに、オツベルという百姓たちの主人がいた。オツベルはとても利口でプライドの高い男であった。ある日、オツベルたちの仕事場に、白いきれいな象がやって来た。

上の3例はいずれも「ある日」の例で、(16)が「シテイル（スル）」型、(17)が「イル」型、(18)が「…ダ」型である。いずれももとの作品に述べられている情景、出来事ともほぼ一致した内容となっている。また、文法的に誤った文にもなっておらず、あらすじとして明確な誤りを指摘することはできない。

けれども、「ある日」はもともと時を表す副詞的成分であり、「そこに」のように前に示されている内容（の一部）を指し示して後の部分との意味的なつながりを示したり、「すると」のように転換という接続機能によって直前の文との関係を構成したりするわけではない。(16)～(18)が、ややもすると出来事の断片的な羅列に過ぎないと感じられるのもそのことをよく表している。したがって、白象の登場を非日常の訪れや新しいエピソードの起点として表しているとは言いがたい。このことは、(16)の「ある日」を「そこに」に置き換え、「そこに、突然、白象がやって来た。」とする場合と比較してみることで、その違いを実感できると思われる。

このことから、「シテイル（スル）」型で「ある日」を選択している学習者は、非日常の訪れや

新しいエピソードの起点を表すことのできる「そこに」「すると」という選択肢があるにもかかわらず、やや不自然とも言える選択をしていることになる。

一方、「イル」型、「…ダ」型の場合は、「そこに」「すると」を用いてもうまくいかないという問題がある。そのため、学習者は他の接続の表現形式を用いざるを得ないことになる。しかしながら、「イル」型、「…ダ」型には「シテイル（スル）」型における「そこに」「すると」に相当する表現形式の候補が見当たらない。そこで、非日常の訪れや新しいエピソードの起点を表すことはできないが、前後の関係構成に比較的柔軟な「ある日」なら、「そこに」「すると」を用いる場合ほどには違和感が大きくならないという判断が働いたと考えられる。つまり、「ある日」を適した表現形式として積極的に選択しているというよりも、他に適した表現形式の候補がなかったために、いわば消極的に選択されたたとらえるべきと考えられる。

3. 直前で文を切らないタイプの「シテイルト」

2. では、白象の登場とその直前の文とを接続する「そこに」「すると」「ある日」に着眼してきた。その結果、「そこに」「すると」が「シテイル（スル）」型に集中して出現するのは理にかなった選択であること、「シテイル（スル）」型で「ある日」が選択されているのはやや不自然であること、「イル」型、「…ダ」型では「ある日」がいわば消極的に選択されていることを指摘した。

ここでは、直前で文を切らないタイプも視野に入れることで、「イル」型、「…ダ」型の場合に「ある日」を選択することも、やや不自然であると言えることを指摘する。

(19) あるところに、オツベルという男がいた。彼が、いつものように百姓どもに仕事をやらせていると、一匹の白象がやって来た。

2. で見てきた例は、いずれも白象の登場の直前で文が切れているものであったが、(19)は白象の登場の直前は「彼が、いつものように……やらせていると」という部分である。このように、白象の登場の直前で文が切れていないタイプについて、接続の表現形式の出現数を示したものが表2である。ちなみに、直前の部分が「シテイルト、シテイタラ」などの表現形式を取る(19)のような例を「シテイルト」と呼ぶことにする⁶⁾。

表2 直前で切らないタイプ：白象の登場を含む文の直前に置かれた文の類型別分布

	冒頭	シテイル(スル)	イル	…ダ	～ノ話	計
シテイルト	1	5	8	13	2	30
来タ白ヲ	6	1	3	3		13
～ニ	22					22
ある日	7					7
その他	2					2
計	38	6	12	16	2	74

直前で文を切らないタイプについては、白象の登場を含む文の直前に置かれている文を「直前の文」とした。(19)で言えば、下線を施した「イル」型の文が直前の文ということになる。

さて、ここで着眼したいのは、「シテイルト」の分布である。「シテイルト」30例のうち23例(76.7%)が「イル」型、「…ダ」型に集中している。

(20) オツベルというお金持ちで、ずる賢い男がいます。ある日、いつものように、百姓たちを従えて、のんのんのんのん仕事をしていたら、そこに白象がやって来た。

(21) 稲こき機械六台と十六人の百姓を従えている、オツベルという金持ちの男がいた。ある日、オツベルがいつものように百姓を見張っていると、白象が小屋にやって来た。

(22) これは、ある牛飼いが物語った話である。オツベルは、十六人の百姓どもを、稲こき機械を六台掘えつけて、稲をこかせている金持ちだ。ある日、いつものように、オツベルが大きな琥珀のパイプをくわえてぶらぶらしていると、どういわけか白象がやって来た。

(23) オツベルは、十六人の百姓をまとめているような、偉いやつだ。ある日、いつものように、十六人の百姓に稲こきをやらせていると、どういわけか、白象がやってきた。

(20)(21)が「イル」型、(22)(23)が「…ダ」型である。「シテイルト」で示されている部分を見ても、(20)の「いつものように……のんのんのんのん仕事をしていたら」、(21)の「オツベルが……百姓を見張っている」と、(22)の「いつものように、オツベルが……ぶらぶらしている」と、(23)の「いつものように……稲こきをやらせている」となっており、いずれもがオツベルの工場での日常的な光景について述べているものであることがわかる。

これは、「シテイル (スル)」型の文が、オツベルの工場での日常的な光景を述べる文であったのと同様であり、「～シテイルト、白象ガヤツテ来タ」という接続も「シテイル (スル)。そこに(すると)、白象ガヤツテ来タ」という接続と同様に、白象の登場を非日常の訪れや新しいエピソードの起点として表していると言える。

しかも、上に挙げた4例にはいずれも「ある日」が用いられているが、直前で文を切るタイプで見た「ある日」のように、出来事の断片的な羅列になっている印象をあまり受けないように思われる。それは、ここに示した4例の「シテイルト」の部分が、直前の文の主題や主語となっている「オツベル」をそのまま引き継いでいることによると思われる。直前で文を切るタイプの場合、先に示した(16)～(18)を見てもわかる通り、直前の文の主題や主語となっている「オツベル」を引き継ぐ形にはなっていない。

このようなことから、「イル」型、「…ダ」型の文の直後に白象の登場をいきなりつなげるのではなく、「～シテイルト」という形でオツベルの工場での日常的な光景を挿入することで、自然な

接続が可能となる。したがって、「シテイルト」が「イル」型、「…ダ」型に集中して出現している学習者の選択の傾向は理にかなっていると言えると同時に、「イル」型、「…ダ」型における「ある日」選択もやや不自然な選択であると言えることになる。

4. 接続の表現形式の選択に対する学習者の意識

さて、2.3.を通して、白象の登場の場面で、「シテイル（スル）」型の直後に「そこに」「すると」、「イル」型「…ダ」型の直後に「～シテイルト」を用いることで、非日常の訪れやエピソードの起点を表すことができることを確認した。

さらに、「シテイル（スル）」型、「イル」型、「…ダ」型のいずれにおいても、「ある日」の選択がやや不自然と言えることも指摘した。

「ある日」を選択した学習者が「そこに」「すると」「シテイルト」という表現形式についての知識を備えていないとは考えがたい。にもかかわらず、学習者がそれらを選択しないのはなぜなのか。その理由について、本稿では山下(2010)と同様のとらえ方ができると考えている。

山下(2010)では、表現上の負担の大きい文型の方をわざわざ選ぶ不自然な選択が、言いたいことを明快に示すことができない要因になっていることを指摘した。そして、学習者に負担の小さい文型についての知識が備わっていないとは考えがたいことから、「同じことを述べるにもさまざまな文の構成のしかたがあり得るという意識を積極的に持つ」ようになることが重要であることを述べた⁶⁾。

本稿における「ある日」選択の不自然さについても、これと同様のことをあてはめられると考える。学習者が「そこに」「すると」「シテイルト」という表現形式についての知識を備えていないとは考えがたいことからすれば、より適切な接続の表現形式を選択するための十分な吟味が行われれば、もっと多くの学習者が「そこに」「すると」「シテイルト」を選択することが期待できることになる。「ある日」の選択の背景には、より適切な接続の表現形式を十分吟味しないまま、「ある日」を選択している学習者の姿をとらえることができるのである。

5. おわりに一言語運用に対する意識を高める文法学習指導

本稿では、「オツベルと象」のあらすじのうち、白象が登場する場面を前の部分とどのような表現形式で接続しているかに着目して、学習者の接続の表現形式の選択意識について考察した。

その結果、オツベルの工場での日常的な光景を「シテイル（スル）」型の文で述べた場合には「そこに」「すると」、「イル」型「…ダ」型の文で述べた場合には「シテイルト」を接続の表現形式とすることで、白象の登場を非日常の訪れや新しいエピソードの起点として表せることが確認された。さらに、「シテイル（スル）」型に「そこに」「すると」が、「イル」型「…ダ」型に「シテイルト」が集中して出現する学習者の選択の傾向が、理にかなったものであることも確認された。

ただし、その人数は54名で全体（199名）の27.1%に過ぎず、例えば「ある日」のように、非日

常の訪れやエピソードの起点であることを十分に表すことのできない接続の表現形式を選択する学習者が多く見受けられる⁽⁶⁾。そして、それらの学習者が他の表現形式を選択するのは、「そこに」「すると」「シテイルト」という表現形式を知らなかったためとは考えがたい。このように考えると、どの接続の表現形式が最も適切なのかを十分に吟味する意識、姿勢が欠如していたために、「そこに」「すると」「シテイルト」を選択肢の候補として思い浮かべられなかった学習者の姿をとらえることができる。

学習者の接続の表現形式の選択には、いずれも日本語の表現として明確な誤りを指摘することはできない。けれども、より適切な表現形式の選択が十分に行われていると言いがたいのは、学習者の文法的な知識の欠如によるものではなく、どの表現がより適切かを吟味しようとする意識、姿勢の欠如によると考えることができるのである。

そのような吟味の姿勢を育てるには、学習者の文法的な感覚を磨き、言語運用に対する意識を高めることが重要となる。学習者が文法的な知見を効果的に活用するためには、文法的な感覚を磨き、言語運用に対する意識を高めていかなければならない。

したがって、これからの文法の学習指導は、知識の不足を補うことではなく、学習者の文法的な感覚を磨き、言語運用に対する意識を高めることに重点を置く方向で、そのあり方をとらえ直していくことが不可欠であると考えられる。

山下(2010)および本稿の考察を通して、文型や接続の表現形式の選択場面で、より適切な表現を選択するための吟味を十分に行っていない学習者の姿をとらえることができた。今後は、どのような場合に学習者の吟味が不十分になるのか、その要因や条件などについてより一般化した形でとらえることが必要であると考えている。また、具体的にどのような学習指導が有効かについて、実験的な試みを通して明らかにしていくことも必要であると考えている。

注

(1) 山下 直, 学習者の文型選択意識と文法学習—表現能力の育成につながる文法学習に向けて—, 人文科教育研究 第37号 2010.8, pp.7-19

(2) 表1の「そこに」には「そこへ, そんなところへ」, 「しかし」には「ところが」, 「その時」「その〇〇に」には「そんな時」「そんな〇〇に」などを含む。また、「～に」は,

- ・ 大きな琥珀のパイプをくわえ, 稲こき機械を六台も持っている, 金持ちのオツベルという男がいた。のんのんのん作業するオツベルのもとに, どういうわけか白象がやって来た。

の下線部のように, 接続詞や指示語を用いずに, 具体的な場所を提示するものである。

(3) 原文の「その, 白象」の「その」は, 既出の本文中に明示されている対象を指示する用法ではない。ここでは「この白象が, これから語るエピソードの中心的存在となる例の白象ですよ」といった意味であり, このことからこの部分がエピソードの起点であることが支持される。

- (4) 例文(15)は形容詞文だが、オツベルがどのような人物かを述べている点で、このような例も「…ダ」型に含める。
- (5) 「オツベルガ……イタトコロニ（／イタラ）、突然、白象ガヤッテ来タ」も日本語として誤っているとは言えない。しかし、「日常」との対比が明確ではないため、非日常の訪れやエピソードの起点を表すには十分な言い方になっていないと考える。
- (6) 表2の「来タ白ヲ」は、
- ・ あるところに、オツベルという男がいました。彼は、十六人の百姓を雇ったり、高価な琥珀のパイプを使ったりするほど、金持ちでした。また、オツベルはざる賢く冷静だったので、仕事場に迷い込んで来た白象を、まんまと自分のものにしてしまいます。のような例を指す。これは、他の例のように白象の登場を「白象ガ……来タ」という形で示さないため、本稿では直接の考察の対象からは外すこととした。
- (7) 山下 直(2010) p.17
- (8) 本稿では「ある日」選択の不自然さを指摘したが、表1, 2に示したように他にも多くの表現形式が用いられている。もちろん、その全てが同じ程度に適切さを欠いているわけではない。「その〇〇に」「そんなある日」「そしたら」「その時」などのように指示語を含むものと、「しかし」「そして」などとは適切さの度合いは異なるととらえるのが自然であろう。ただ、ここでは「そこに」「すると」「シテイルト」という表現形式を知識として知らないはずがないという前提のもとに、なぜそれらを選択する学習者がもっと多くならないのかという観点で問題をとらえている。「ある日」以外の表現形式についての詳しい考察については、稿を改めて論じたい。